

2020.05.27

<コロナ禍に学ぶあたらしいライフスタイルの提案>

『コロナ禍に学ぶ 2030 年の
心豊かな暮らし方のか・た・ちを考える』
<Ver.1>



石田秀輝 Emile H. Ishida

emile.h.ishida@gmail.com

東北大学名誉教授、（一社）サステナブル経営推進機構（SuMPO）理事長、地球村研究室代表、酔庵塾塾長、星槎大学サテライトカレッジ in 沖永良部島 校長 沖永良部島観光親善大使

本提案書は、一木典子さん（㈱オレンジページ 代表取締役社長）、蓮井幹夫さん（有限会社 蓮井幹生写真室 代表）、黒木潤子さん（（株）インター・ビュー代表取締役社長）を管理者・モデレーターとして公開された「2030年の心豊かなライフスタイルを考える」Face Book 公開グループに参加頂いた240名の方々の貴重なご意見、および東北大学大学院環境科学研究科に開校した社会人大学院 SEMSaT（高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニット）修了生のうち20名を超える有志のご参加による3度のWEB会議（コーディネーター；東京都市大学環境学部教授 古川柳蔵さん）、（一社）サステナブル経営推進機構（SuMPO）壁谷武久専務理事及び理事会の皆さんとのWEB会議を通して議論した意見をバックキャスト視点で纏めたものである。

コロナ禍の大変な折に貴重なご意見やご助言を頂いたこと、改めて御協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。今後、さらにキーワードを集め、たくさんのライフスタイルを描き、そこから、新しいビジネスや政策を提言する予定です。

これからも、このコロナ禍の危機（Crisis）をあたらしい機会（Chance）に、そして新しい文明創成につなげるため、さらなる御協力を頂ければ幸いです。

<注> 今回のコロナ禍は、企業経営という立場からは、多くの危機的状況を発現させ、生活者の立場からは雇用契約の破棄、雇い止めなどの大きな経済的ダメージを生み出した。また、家庭内ではDVによる被害なども発生させた。本提案では、これらの要素については一切触れていない、あくまでも今回のコロナ禍での気付や学びを2030年の暮らし方（ライフスタイル）にどのように活かすべきなのかをバックキャスト視点で纏めたものである。

目次

1. はじめに	
1-1 視点1 地球環境制約	3-4
1-2 視点2 金融資本主義の限界	4-5
1-3 視点3 クライシスのリバウンドは環境負荷を上げる	5
2. コロナ禍で学んだこと（仮説）	
2-1 バックキャスト思考で見えてきた 2030年暮らし方の7要素	6-8
2-2 7要素に必要なキーワードの収集	9
2-3 2030年の心豊かな暮らし方のか・た・ち キーワードから見えてくるライフスタイルイメージ	10-13
3. 2030年の暮らし方のかたち キーワードとライフスタイル	
3-1 地域での暮らしを大切にしなければなりません ライフスタイル 1-1 自分流の暮らし方 ライフスタイル 1-2 お父さんはえらい！ ライフスタイル 1-3 本社は田舎です！ ライフスタイル 1-4 田舎暮らしはかっこいい！	14-18
3-2 知識や教養が大切にされます 文化芸術は生命維持装置（命の次に大事なもの） ライフスタイル 2-1 それが自由の相互認証！ ライフスタイル 2-2 粋な目利きは変わり者？	18-20
3-3 地域でつくれるものは地域で創ります ライフスタイル 3-1 お家もサーキュラーエコノミー！ ライフスタイル 3-2 都市から堆肥がやって来る！ ライフスタイル 3-3 AIが叱られる！	20-23
3-4 自然をもっと意識した暮らしになります	24-25
3-5 健康であることが大切にされます	25-26
3-6 お金をかけずに生活を楽しみます	26-27
3-7 時々思い切って贅沢します	27-28
4. あとがき	28

『コロナ禍に学ぶ 2030 年の心豊かな暮らし方のか・た・ちを考える』

1. はじめに

今回のコロナ禍は日本に根付く様々な問題を炙り出した。危機に全く対応できない政府などという評価は他に譲るとして、会社と社員の関係、時間の価値、家族という概念、自然との関わりなど、コロナ禍という制約の中で我々が今まで既成的な概念から脱皮できていなかったことをあらためて考え、感じ、学んだのだと思う。

東京ではサラリーマンの 5 割以上がテレワークを経験したという。その結果、通勤時間が無くなり、仕事の効率が上がり、何よりも家族と過ごす時間が格段に増え、気分転換のための散歩であらためて自然の有難さや不思議さを感じ、今まで知らなかったご近所の方々とも笑顔を交わすことが出来るようになったと知った。

では、このコロナ禍（パンデミック）が終焉した時、我々の暮らしはコロナ禍以前に戻るのだろうか？ 個人的には、コロナ禍以前より、より持続的で公正な社会になってほしいと願っているのだが果たしてそれは可能だろうか？ 14 世紀ヨーロッパを襲った黒死病は、結果としてあたらしい機会や創造性を生み、そこからルネサンスの芸術や文化の概念が開花し、近代ヨーロッパが始まった。過去の多くのクライシスは、そのリバウンドとしてあたらしい価値を生んできたが、このコロナ禍を活かし、より持続的で公正な社会創成に舵を切るには、いくつかの制約を（排除するのではなく）肯定し、それに正対することが重要である。その最も重要かつ大きな制約は地球環境制約である。

1-1 視点 1 地球環境制約

2020 年 4 月 20 日、原油価格が 1 バレル 37 ドルになった。1 日当たり 1 億バレルの消費が 7 千万バレルに低下したというのだから 30%の消費減である。物資も人も大きく移動が減少した結果である。日本の温室効果ガス 2030 年削減目標は 2013 年比-26%である*1 から、（極めて荒っぽく言えば）ほぼそれに相当する。少なくとも、現状から「3 密」を除いた状態が 2030 年の姿であり、今我々はそれを体感しているともいえる。国際的には、2030 年の温室効果ガスの削減量は-50%でも不足といわれており、更なる挑戦が必要ではあるが、今、-30%の世界を体感できていることは、大きな学びでもあろう。

地球環境制約はこれだけではない、生物多様性も危機的状況である。1970 年から 2010 年の間に脊椎動物の 52%を失い、昆虫の 75%を過去 27 年間で失い、このままでは 100 年以内にすべての昆虫が絶滅してしまう。（<https://indeep.jp/75-percent-decline-over-27-years-in-total-flying-insect-biomass/>）

自然界の植物の 90%は昆虫によって受粉されており、種の絶滅は我々の食糧供給にも大きな影響を与える。物理学者のアインシュタインは「もしハチが地球上からいな

くなると、人間は4年以上は生きられない。ハチがいなくなると、受粉ができなくなり、そして植物がいなくなり、そして人間がいなくなる」と言ったが、

(<http://blog.livedoor.jp/nwknews/archives/4429299.html>) まさに今、そこに向かって全力で進んでいるのだ。人間も多様な生物の一つであるという認識の下、人が自然に生かされていることを知り、自然を活かし、自然を往なすという暮らし方に改めて意識を向けねばならぬ。

資源やエネルギーの使用をこのコロナかと同程度以上に削減し、自然としっかりと向き合うという、地球環境制約を肯定したうえで新定常化社会（生命文明社会）を創成しなければならないということである。

1-2 視点2 金融資本主義の限界

もう一つ重要な視点がある、コロナ禍が起こらなかつたら、経済は変わらず成長し、豊かな暮らしが維持されていたのかどうかという視座である。日本に限れば、1970年代初めまで約9%だった経済成長率は1991年のバブル崩壊までに約4%台に減少し、それ以降2018年までは1%前後を低迷してきた。平成の30年間でGDPは1.12倍（米国約3倍、EU約2.5倍）しか伸びず、アベノミクスの6本の矢はどこに飛んでいったのかさえ分からない。課題先進国である日本は、すでに現在のグローバル資本主義（あるいは金融資本主義、新自由主義）が限界を迎え、従来の延長では成長が望めないことがわかりながら次代の新定常化社会*2（生命文明社会）が描けず、この30年間のたうち回っていたのである。この状態が続けば、経済にも生活にも将来が見えない閉塞感を生み出し、少子化、人口減少そして結果としての高齢化社会を迎えることになり、すでにその兆候が顕著に見え始めているのが今の時代なのである。

コロナ禍が起こらなくても、経済の行き詰まりと地球環境の劣化の二重苦で早晚限界

を迎えることが避けられなかったのである。今回のコロナ禍は、何とか過去の成功にしがみつき、過去の延長でしかこの二重苦を乗り切れないと信じ、もがいている人たちに、そうではない新しい道があることを現実として見せ、学ばせてくれているのだろう。コロナ禍が、限界を

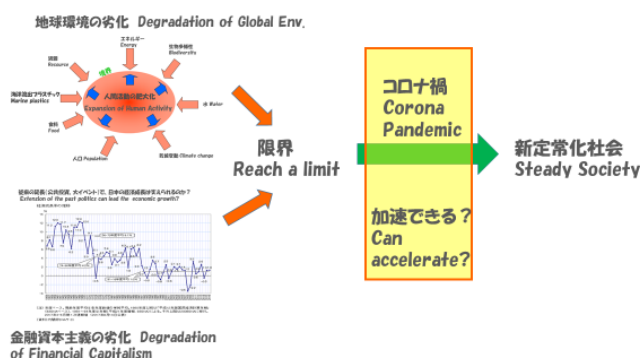


Fig.1 コロナ禍が新定常化社会創成を加速できるのか?

主義との決別の機会を与えてくれたのである。(Fig.1)

だからこそ、今この2つの限界(地球環境の劣化、グローバル資本主義の劣化)に共通した解を見つけ、新定常化社会(生命文明社会)を創成、移行することが求められている。

1-3 視点3 クライシスのリバウンドは環境負荷を上げるのか

そのためには、何を学んだのか明確にしなくてはならぬ。過去のクライシスも多くの場合環境負荷を下げたが、残念ながら、必ずと言ってよいほどリバウンドでクライシス以前よりもっと大きな環境負荷を生み出した。2008年のリーマンショックでは、お金の循環が断たれたが国が大量の資金を市場に投入することで、2011年の東日本大震災では欠乏した物資(モノ)を大量に投入することで、その危機を乗り越え、結果としてリバウンドを起こし環境負荷の増大を招いた。だが、今回のコロナ禍は従来とは大きく異なっている、それは生活者個々人の意思によって3密の回避を受け入れ、危機が通り過ぎて行くのをじっと待ったのだ。従来ように国がトップダウンで危機を脱出する術を与えたのではない、自らの意思の結集がコロナ禍を乗り越えさせたのだ。

(Fig.2) そうであれば、今回はリバウンドを起こさず、新しい定常化社会(生命文明社会)、すなわち、地球環境に可能な限り負荷をかけず、ワクワクドキドキ心豊かに生きることができる社会(制約を受け止め豊かに生きるバックキャスト思考)へ移行できるのではないか、コロナ禍(Crisis)という危機を機会(Chance)出来る可能性が大きいのではないかと思う。

では、それはどんな世界なのだろう？

クライシスは地球環境に大きな影響を与える

Global crises have spurred the largest emissions drops

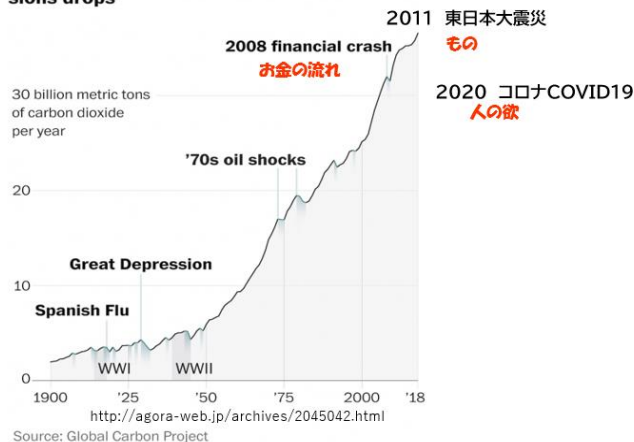


Fig.2 コロナ禍はリバウンドを起こさない？

*1 地球温暖化防止のための国際ルール「パリ協定」に基づく温室効果ガス削減などの目標(NDC)について、経済協力開発機構(OECD)が-26%では「不十分だ」と指摘したが、政府は削減目標の数値を引き上げずに国連に再提出した

*2 生命文明社会 人間も種の一つであり生命循環の中で生きるという時代の文明社会

2. コロナ禍で学んだこと（仮説）

2-1 バックキャスト思考で見てきた 2030 年暮らし方の 7 要素

緊急事態宣言が出る少し前の 3 月末に大都市から田舎までのいくつかを回ってきた。コロナ禍の影響を肌で感じたかったからだ。緊急事態宣言が出る前ということもあるのだろうが、田舎はあまり変化がなく、都会からは人が消えたという感覚だった。これでは、あっという間にビジネスに大きな影響が出るものと思っていたが、接客が不可避なサービス業などを除けば、崖から転げ落ちるような急激な変化は知る限り見られず、それはテレワークという新しいワークスタイルに負うところが大きいのだと知った。

さらに、テレワークを主な武器として仕事をしている方々何人かに、そのメリット/デメリットを伺うと、圧倒的にメリットが大きいことも知った。それは、テレワークで思った以上に仕事が効率的に進められるという発見があっただけでなく、仕事の足場を会社から家に変えることで、色々なものを見る視点が大きく変化したらしいことである。それは、家という場と家庭という環境の中で時間という価値の再発見であったようだ。通勤時間が無くなったこと、あるいは自分の裁量でワークの時間が決められるということから生まれる、新しい時間の概念である。自分の裁量で時間を管理し、その中でメリハリをつけて、ワークとライフのあたらしい価値観を生み出してゆくということなのだろう。本当は通勤していても考えられたことだったのだろうが、会社を拠点にした思考では「忙しい」が既成事実化され、家族との関わりをこれ

コロナ禍を経験し

1. 田舎は大きな変化なし

2. 都会からは人が消えた



3. テレワークは働き方、会社との関わり、時間、空間(距離)の概念を変えた

4. テレワークは会社という足場から家という足場と家庭という環境を拠点とする暮らしを生み、生活の中にある時間やライフとワークのあたらしい関わりを生み出した

5. テレワークが家を足場とすることによって、地域依存の意識が生まれた
(自然・コミュニティー・お互い様)

6. 田舎は家を足場とする暮らしのかたちが基本であり、
テレワークが都市と田舎を結ぶ共通の視座を生み出し、境界は希薄になった

Fig.3 コロナ禍で学んだこと

ほど深く考える切っ掛けもなかったということかもしれない。ワークでは集中して仕事をこなし、ライフでは家族との時間を大事にし、ワークとライフの合間の散歩で

は、身近にある自然にあらためて感動し、愛おしく思い、すれ違うご近所さんには、話したこともないのに妙な親近感が生まれるた。額にしわを寄せて、コミュニティーを生み出すには、なぞと議論するより、生活の拠点を家にするだけでコミュニティーなどは自然と生まれてくるのだともあらためて知った。

コロナ禍は、今までの会社を拠点とする暮らしから、家（家庭）を拠点とする暮らしに代わることで、生活の中にある時間やライフとワークの関わりをあらためて深く考え、心豊かな暮らしとは何かという気づきを与えてくれたのだろう。（Fig.3）

そんなことが、おぼろげながら見えてくると、どうして東京に住むのか、自然のたっぷりある田舎でテレワークを中心にした仕事が生まれれば、2040年に日本のまちの半数が消滅するなどということもなくなるだろう。いやそれどころか、田舎と都会の精神的な距離が近くなり目線も同じになるのではないかとも思えてきた。新幹線は1時間に一本でよい、飛行機も今までの1/10、時折の出張は日帰りなぞ止めて、色々な人たちとの懇親や旧交を温める絶好の機会と思えばよい、同時に五感も鍛える絶好の機会だ。

一方で、田舎はどう変わればよいのか、これはなかなか情報が集まらない。当然だ、「3密」なぞ基本的に無いのだから、ただ、都会の人たちがこのような変化を望んだとき、それを受け入れられるのだろうか？さらには受け入れた結果、自立型の田舎に変身するには何を考えればよいのだろうか？その変化を担うのは誰だろうか？残念ながら、この部分に関してはたくさんの方から情報を得ることが出来なかった。今後の課題であるが、今の段階では沖永良部島という田舎に住んでいる筆者がその代表として意見を述べさせていただくことにした。

以上の事前調査を基に、地球環境の劣化×金融資本主義の劣化という2つの制約に共通する解を、コロナ禍から学んだことをバックキャスト思考で整理し、ワクワクドキドキ心豊かな2030年の暮らし方（ライフスタイル）の具体的なか・た・ちを考えるために7つの切り口を用意した。

1. 地域での暮らしを大切にし分け合うようになります。

都市でも田舎でも、各々の地域に根づく暮らし方のかたちが生まれ、都市と田舎との視座が共有化されることによって精神的距離が近くなる。

2. 知識や教養が大切にされます。

物質的な豊かさから精神的な豊かさが求められるようになり、認知的な能力より非認知的な能力が生活の中で求められる。

3. 地域でつくれるものは地域で創ります。
食、もの、エネルギー・・・の知消地産（地域に必要なものを地域でつくる）がナンバー1よりオンリーワンという地域の個性と地域内の循環を生み出す。
4. 自然をもっと意識した暮らしになります。
自然が身近に感じられ、自然に活かされていることを知り自然を活かし、そして自然を往なすという概念が暮らしの基盤になる
5. 健康であることが大切にされます。
働くという概念が大きく変わり、ライフとワークがオーバーラップする暮らしと地域とのつながりが、健康寿命にも大きく関わってくる。
6. お金をかけずに生活を楽しみます。
『嬉しい制約』（ちょっとした不自由さや不便さ）を個（人）やコミュニティーの技や知識や知恵で克服することが日常になり、お互い様や工夫、修理して使うなどが生活のキーワードになる。
7. 時々思い切って贅沢します。
贅沢とは非日常であり、それをあまりお金を介さないで享受できる機会が生まれる。



Fig.4 バックキャストで考えた 2030 年の暮らし方の 7 要素

この7つの要素の基盤は1. 地域での暮らしを大切にし分け合うようになります。であり、田舎でも都市でも（具体的な暮らし方は異なるが）共通の概念を持つだろう。そしてこの基盤の上に6つの要素が成立するのではないかと考えた。（Fig.4）

都市：商業、流通などの発達の結果、限られた地域に人口が集中している領域

田舎：都会から離れ、自然の豊かな地方

地域：個性的な内容を有する広がり

2-2 7要素に必要なキーワードの収集

7つの要素各々をより具体的なものにするためのキーワードの収集を3つのグループにご協力を頂き行った。

Group 1 「2030年の心豊かなライフスタイルを考える」 Face Book 公開グループに参加頂いた240名の方々（コーディネーター：一木典子さん（㈱オレンジページ 代表取締役社長）、蓮井幹夫さん（有限会社 蓮井幹生写真室 代表）、黒木潤子さん（㈱インター・ビュー代表取締役社長）

Group 2 東北大学大学院環境科学研究科に開校した社会人大学院 SEMSaT（高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニット）修了生のうち20名を超える有志の方々による3度のWEB会議（コーディネーター；東京都市大学環境学部教授 古川柳蔵さん）

Group 3 （一社）サステナブル経営推進機構（SuMPO）理事会の方々（コーディネーター 壁谷武久専務理事）

実際には、7つの切り口は各々独立しているものではなく、ライフスタイルという視点では、当然重複するものもある、現時点では7つに分けたものの、さらに検討することにより合体させたり、新たな切り口が生まれることも考えられるが、現時点では、当初設計のままで検討した。

また、7つの要素の各々は、都市と田舎では視点が異なってくるものもあることから、都会からの視座、田舎からの視座の双方を議論してみた。

2-3 2030年の心豊かな暮らし方のか・た・ち

キーワードから見えてくるライフスタイルイメージ

7つの要素各々のキーワードから、各要素ごとの代表的なライフスタイルを描いてみた。

1. 地域での暮らしを大切にし分け合うようになります

<ライフスタイルイメージ> 都市での仕事はテレワークが一般化し、家で仕事をする時間が圧倒的に増えました。その結果、足場を会社から家に変えたというだけでは説明が出来ないくらい大きな変化が起こりました。深くなった家族との関係、御近所さんとの関わりも増え、ゆったりした時間が自然を愛おしく思う心を蘇らせてくれました。それは家を中心に働くことの多い田舎暮らしの中には当たり前のようにある暮らし方のかたちであったことにも気が付きました、大発見でした。大都会に本社があること、大都会で働いていることがステータスだった時代ははるか昔の出来事です。今は都市も田舎も自立し同じ目線でお互い尊重し合い、刺激し合い、そしてどんな小さな田舎も当たり前のように世界と繋がっています。

2. 知識や教養が大切にされます

<ライフスタイルイメージ> 豊かさの価値が物質的な消費に依存する社会は終焉し、外的エネルギー消費から内的なエネルギー消費の時代へ移行する速度がますます早くなっているようです。エネルギーや資源を使わずとも豊かに生きるという価値が大衆化したのです。学校では画一化された一方通行の教育ではなく、必要に応じて必要な力を借りながら自分のペースで自分に合った場所で学びが提供されるようになり、誰でも一生涯学びを続けることが出来るようになりました。それは生活の場が家に移行したこととも強く関係します。他者との比較ではなく家族のや個（人）の個性を醸成させ続けることが家族の生き方にもなっているからだと思います。一方で、都市と田舎の視座が近くなった結果、面白い現象も沢山起こり始めました。例えば、世界を代表するオペラと田舎の祭りのコラボレートが違和感もなく行われるようにもなったのです。先日女子中学生3人ほどがドニゼッティの『愛の妙薬』と『曽根崎心中』のお初を引き合いに恋愛論をぶつけていました、ちらりと聞いただけですが、この2つが同じ視点で見えているなんて・・・大したものですよ（笑）

3. 地域でつくれるものは地域で創ります

<ライフスタイルイメージ> もう10年以上前になりますかねえ、あのころの日本は・・・食料自給率37%、3千万トン以上を海外から輸入し2800万トンほどを廃棄していたそうです、輸入量とほぼ同じ量を捨てるなんて…その中にはまだ食べられ

る6百万トンほどの食品ロスも含まれていたと聞きました。一人当たり1年間51kgにもなり、そのころの一人当たりのお米の消費量と同じほどだったそうです、驚きますね。モノもほとんどが海外の安い労働力に頼った修理の出来ないものばかり、地球環境がSDGsがなどと言いながら大量生産大量消費絶好調！というところだったのですかねえ。エネルギーだってすごいですよ、9割以上を輸入に頼り、原子力発電を入れても自給率は1割にも満たなかったのですね。世界の人口は75億人から2050年には96億人に増えるというのに、多くを海外に頼って不安はなかったのかしら。でも、たった10年程でこんなに変わったことにもびっくりね、結果として、都市と田舎という境界が希薄になったことがそれを加速化させたということなのでしょうが、食もエネルギーも、ものづくりも、そして学びも各々の地域の中でぐるぐる回るという概念が当たり前になってきました。何でもナンバーワンよりオンリーワンが大事にされる時代とでもいうのかしらね・・・時間もゆったりと流れ、こんな時代を生きられるって・・・

4 自然をもっと意識した暮らしになります。

<ライフスタイルイメージ>

地域間は大型の4連結トレーラーなどが高速道路を走って繋いでいますが、地域内の移動は小さな電気自動車や自転車などが主役になりました。都市では交通量も随分と減ったので、道路のアスファルトを剥がして自然公園にしたり、週替わりで面白い屋台が立っていたりします。お蔭で一人で、あるいは家族と近場を散歩しても必ず緑に出会えるようになりました。道すがら摘んだ野草が食卓に上ることも多くなりました。緑の中を抜けてくる風に匂いがあることも知りましたし、鳴き声だけで鳥の名前もいくつかわかるようになりました。夏の暑い日、木陰に入ると何とも爽やかで、小さな葉っぱにしがみついている虫たちにも愛おしさを感じます。10年前には風が吹いても生暖かかった思い出しかなく、自然にこれほどの力があつたことを体感できるのはとても素敵です。昔を知らない子供たちは、田舎は自然があつていいなと繰り返しますが・・・姉妹協定を結んでいる田舎には家族で出掛けることも多いのですが、子供たちは毎年4か月くらい田舎留学しています。最先端のAIなどの授業はテレワークですが、田舎にいる時の多くの時間は都会風に言えばサバイバル学習です。田舎のお爺やお婆が先生になって野菜をつくり、素潜りで魚を取り捌き、料理を作り、ロープワーク、野宿の仕方・・・こんな山ガキ、海ガキ教育、遅くなるはずですが。上級生になれば、下級生に自分の知識や技を伝え、自分はさらに工夫を繰り返し、上位の学びを続けるそうです。人に寄り添い、人の痛みがわかり、相手を認めながら自分の主張や行動もしっかりと組上げて行く、非認知能力というのだそうですが、変化してゆく子供たちの成長は時には眩しくも見えてきます。先日、階段で足をぶつけ腫れてしまい、痛くて湿布薬を探したものの見つからず子供に頼んだら、何とも家の前のヨモ

ギを取ってきて煎じて、あっという間に塗り薬をつくってくれました。キツネにつままれた気分でしたが、こんなことも教えてもらえるんですね…

5 健康であることが大切にされます。

<ライフスタイルイメージ> 10年前に比べて、寿命はそれほど延びてはいないようですが、それは死に対する理解が進み、尊厳死の選択が出来るようになったからのようです。一方で健康寿命は世界一になりました。まず働き方が大きく変わったことが一つの理由だと思っています。テレワークが始まって、仕事に年齢とか肩書とかの意味合いが希薄になりました。指示された仕事をこなすというのではなく、自分で仕事を生み出し、会社にそして結果として社会に貢献するという意志のようなものが生まれたからです。そうすると会社に属するというより、会社と自分の目線は対等になり、そうですね、能力によって契約をしている感じです。ネクタイをして毎日時間通りに通勤していた時代が信じられませんが、今はいくつかの会社と契約を結んで週休3日くらいのイメージで仕事をこなしています。使うことはあまりありませんが名刺はいつも5-6枚ありますね。と言っても、結局は好きな仕事を選んでいる訳ですから基本的にはワークもライフも境界が無くなっているという感じですかねえ・・・もちろんストレスが溜まることはありますが、それは自分に対してですから、毎日仕事を指示されていた時代とは質が全く違います。テレワークでも、定型の仕事をしている人たちにはまだ定年という概念が残っていますが、2-3次産業の多くの人たちには定年は無くなりました。1次産業の人たちと飲んでみるとよく、死ぬまで現役そしてぼっくりよ、と大笑いしながら言いますが、やっと僕たちも同じ感覚になりました。頭がついて行けなくなったら定年です。生活環境も大きく変わりました。時間をかけても丁寧な暮らしのかたち、昔でいうスローライフのようなものかな、自然や食のリテラシーを大事にすることが生活の基本になって、健康のため！健康のため！というのではなく家族や自分と向き合いゆったりと暮らすことも大きく影響しているのではないかと思います。そうそう、家中心の暮らしでご近所さんらとの関係が濃くなったことも影響があるかもしれません、お互いに差し入れがあったり、一緒に運動したり、とにかく会えば大笑いの連続ですから……

(平均寿命/健康寿命(2018) 男 80.98/72.14 歳、女 87.14/74.49 歳)

6 お金をかけずに生活を楽しみます。

<ライフスタイルイメージ> 経済成長率という言葉はついぞ聞かなくなりました。もちろんマイナスでは困るのですが、限りなくゼロに近くてもいいじゃないかという思いが社会を覆っています。経済成長率だけが国の豊かさの指標の時代もありましたが、結果として大量生産大量消費という活動が大きな地球環境負荷を生み出し、お金だけが豊かさの物差しとなって人の心まで荒んでいたようです。今はちょっとし

た不自由さの中で自分やコミュニティの知恵・知識・技を使ってその不自由さを乗り越え、結果として生まれる愛着感や充実感、達成感を味わうことが当たり前になってきました。ちょっとした不自由さというのは、実は『喜ばしい制約』だということに誰もが気づき始めています。小さな土地があれば、いやベランダでも季節の野菜をつくりご近所に差し入れ、DIYの得意なお隣さんは、お年寄りの家を時々訪問しているようです。お互いさまという言葉も復活しています。流行りの言葉で言うならコミュニティの中でシェアやレンタル、共同作業のようなもの、多機能小規模自治みたいなものでしょうか、そんなお互い様が自発的に生まれ始めたという感覚です。豊かさが、物質的なものから精神的なものへ移行し、一過性では無く、ゆっくりと積み上がってゆく文化的なものが大事だということもあるかもしれません、あらゆるものが、丁寧にゆっくりと時間をかけてつくられ、その過程を楽しみ、出来上がった成果を楽しみ、ものであれば修理を繰り返し、使い切る。文化や教養であれば、それを土台にまた次の高みへ向かって行く、そんな暮らしにはお金という価値は当然一番ではなく『喜ばしい制約』を個（人）や家族、あるいはコミュニティで越えてゆくことに最も大きな価値があるように感じています。

7 時々思い切って贅沢します。

<ライフスタイルイメージ> 出社するって贅沢だよね、本社まで出かけると4日は掛かるからね、ゆっくりと旅する気分・・・そんな時はリアルに友人たちと一献会も計画して・・・リアルって五感をフルに使うからかもしれないけれどテレワークで話している時と何か感覚が違うのよね。リアルっていえば、本屋さんも贅沢だよね、古本屋さんの方が好きだけど、ちょっとかび臭い紙の匂い、1ページずつ手でめくってゆく感覚、時間をかけてゆっくり本を選ぶなんて・・・ わかっている気はしていたけれどリアルに経験すると全く違う感覚になるって、とても贅沢なことだと思う。姉妹協定を結んでいる田舎だって、数日伺うのと1か月住まわせて頂くのでは全く違う、旨く言えないけれど景色や臭いや音が自分のものになるって感じかな、でも同じ景色や臭いや音は二度と繰り返さない、毎日違うの、そこでは日常なのだけれど感覚としては非日常、自然って揺らいでいるようにも感じるからね、そんな経験が出来るのも、とても贅沢なことだと思う。

3. 2030年の暮らし方のか・た・ち

キーワードとライフスタイル

3グループとの議論で収集したキーワードをソーティングし、さらにそのキーワードからイメージできるライフスタイルを描いた。キーワードは7つの要素に完全に分類できるものではなく、そのいくつかは重複した。

1 地域での暮らしを大切にし分け合うようになります

＜ライフスタイルイメージ＞ 都市での仕事はテレワークが一般化し、家で仕事をする時間が圧倒的に増えました。その結果、足場を会社から家に変えたというだけでは説明が出来ないくらい大きな変化が起こりました。深くなった家族との関係、御近所さんとの関わりも増え、ゆったりした時間が自然を愛おしく思う心を蘇らせてくれました。それは家を中心に働くことの多い田舎暮らしの中には当たり前のようにある暮らし方のかたちであったことにも気が付きました、大発見でした。大都会に本社があること、大都会で働いていることがステータスだった時代ははるか昔の出来事です。今は都市も田舎も自立し同じ目線でお互い尊重し合い、刺激し合い、そしてどんな小さな田舎も当たり前のように世界と繋がっています。

都市から見たライフスタイル

＜生活シーン＞

ライフスタイル 1-1 自分流の暮らし方

10年前頃までは未来の子供たちのことをそれなりに想い、電気パチパチ節電やエコの電化製品をたくさん買って見たものの、ほとんど地球環境負荷削減には貢献しなかったようです。そんなことがあったことを今では信じられません。当時は、メディアや行政の宣伝に煽られるまま、それが流行であるかのように皆が同じ行動をしなければならぬような気持ちになっていました。でも、家と会社という2つだった足場が家という一つの足場と家庭という一つの空間に代わってから、皆自分流の生活を意識し始めました。人に合わせるのではなく、家族の生活リズムが優先される暮らしです。家族の中で色々なことを考え試す暮らしのかたちです。その結果驚くほど地球環境負荷は下がっているそうです。そんなに必死に努力もしていないのに、不思議なものですね。

Key word 暮らしの個性化

ライフスタイル 1-2 お父さんはえらい！

家にいる時間が増えたからなのか、家族と話をする時間が増えたからなのか、子供たちは色々な機会に大人に一目を置いているような様子が見えています。それを意識し

てか、大人たちも自分たちの行動に意識が向いているようです。我が家では子供たちが余程興味があるのか私の仕事のことを色々と聞いてきます。テレワークで部下と話しているのを垣間見ているからでしょう。子供たちにとってはえらく難しい話をテキパキと進める親父のことを少し自慢に想ってくれているのかもしれませんが。家事も自然と子供たちが分担してくれるようになりました。仕事の合間には気分転換に一人で、時には家族で近所を散歩します。都会の中にも鳥の声が聞こえたり、小さな花が咲いていたり、新しい小道を発見したり、ばったり出会ったご近所さんとBBQの約束をしたり楽しい時間です。家に戻ると姉妹農家協定を結んでいる農家のEさんから小包が届いていました。都市がいざという危機になった時に優先的に食料などを供給してもらう協定ですが、何度かお互いに行き来する中で今では家族ぐるみの付き合いになっています。

Key words 家族の在り方/家族との絆 ゆとりの時間 都会と田舎の姉妹協定 ご近所コミュニティー 子供も自然と家事分担

都市から見たライフスタイル key words

- ・暮らしの個性化
- ・ワークとライフが重なる暮らし
- ・田舎が近づく（都市から見て）、世界がフラットに（田舎から見て）都市から田舎にお手伝い
- ・移動式住居カー、多拠点居住サブスクサービス
- ・家族の在り方/家族との絆
- ・ゆとりの時間
- ・都会と田舎の姉妹協定
- ・拡張家族暮らし（他人同士が家族のように暮らす）
- ・ご近所コミュニティー
- ・非消費活動（消費活動で解決される課題は限られている）
- ・ご近所に時間や知識のお裾分け
- ・子供も自然と家事分担
- ・野ガキ化

<働き方シーン>

ライフスタイル 1-3 本社は田舎です！

テレワークが当たり前になり、仕事場は自宅か自宅の近くにある町営テレワーク・スタディー・ルームです。恐らくどこの町内にも一つ以上そんな場所が出来ています。本来は自宅に仕事場が無い人のために設置されているのですが、気分転換にあちこちのスタディー・ルーム渡りをしている人もいます。テレワークに移行してから

転勤という概念もなくなりました、どこに居ても都会/田舎/世界とつながっているのですから。最近のブームは『田舎本社』です。東京からの本社脱出が進み、田舎に本社があることがかえってステータスになりました。中には辺鄙な離島に本社を構える会社さえ出てきました。月に1度くらい本社に出かけるためには最低でも2泊3日、本社が離島にあるという距離的なこともそうですが、新幹線は1時間に一本、飛行機も10年前に比べれば1/10になっていますから・・・でもそれに文句を言う人はいません。その旅は非日常でとても楽しみで、感性も磨かれているような気分になるのですから。テレワークが一般的になり始めたころ、ものづくりの人たちは毎日現場に出ねばならず、格差が生まれるのではないかとの議論もありましたが、結局危惧に終わりました。大量生産大量消費という概念はすでになく、商材は良いものを長く、そして修理ができることが前提となっています。中小規模の田舎にある工房ファクトリーで働いている人は皆その近くに住み、AIロボットをフルに使い、ものづくりの人たちは自分たちに求められる匠の技を磨くことに仕事のやりがいや有難さを感じているようです。

Key words 東京に本社がなくなっちゃっていいじゃないか（テレワークの普及）新しい移動の概念 みんなとする仕事の有難さ

働き方シーン Key words

- ・東京に本社がなくなっちゃっていいじゃないか（テレワークの普及）
- ・ワークとライフが重なる暮らし
- ・脱時間管理
- ・何枚もの名刺を持つ
- ・企業は固定オフィスを半減、社員も近郊・田舎暮らしで販管費半減
- ・新しい移動の概念

田舎から見たライフスタイル

ライフスタイル 1-4 田舎暮らしはカッコいい！

都会ではテレワークという新しい仕事の仕方が始まって、田舎は様変わりした。都会から大勢が家族での移住を始めた。今までのコミュニティにプラスにもなって欲しいと、移住者は消防団に入ることが前提という条件を付けたが、移住者は皆OK！、でも都会の白っちょいには実際のところ無理かなとも思っていたが、結構重いホースを持って走っている。どうやら毎週の演習の後の飲み会も楽しみなのか、一月もしないうちに家族みんなコミュニティにしっかり溶け込んだようだ。都会っ子だった子供たちも田舎の子供たちと一緒に山を駆け巡っている、立派な山ガキだ。テレワークというのは結構自由なようで、地元の人に教えてもらって野菜や料理をつくったり、行事にも良く参加してくれる。テレワークをしながら本格的に農業を始めてしま

ったものもいる。わしらには当たり前だと思っていたが、何度もここの自然は美しい、癒されると言われるとこちらも気分が良くなって、今年から皆で森の整備もすることにした。こんな田舎に住んでいることをテレワークの人たちは、かっこいいと思っているようで、この田舎のことを世界中に発信してくれているようだ。移住してきている人たちにも気持ちよく仕事をして欲しくて、町では集落ごとにテレワークのハブ基地をつくることも決めた、新しい集落の収入源だ。移住者達の田舎風オシャレな住宅を含むインフラ整備が雇用や仕事を増やし、町に活気も戻ってきた。2040年には消滅するといわれていたのがウソのようだ。テレワークが増えると、世界中から人がやって来ることにも驚いた。皆が発信してくれるお陰で、どうやら非日常を楽しみたいという人達らしい。確かに自然しかないこんな田舎なものなあ・・・でもこれが世界とつながっていると思うと不思議ではある。そうそう、こんな田舎のことを最近ではスーパーシティと呼ぶらしい。

Key words スーパーシティ 世界に誇れる一流の田舎暮らし 自律分散型社会 世界とつながる田舎暮らし テレワークしながら農業（バーチャルワーカー週休3日6時間労働）

田舎から見たライフスタイル **Key words**

- ・スーパーシティ 世界に誇れる一流の田舎暮らし 自律分散型社会
- ・世界とつながる田舎暮らし
- ・田舎暮らしがかっこいい
- ・2拠点居住
- ・テレワークしながら農業（バーチャルワーカー週休3日6時間労働）
- ・小さな循環（経済も食も）
- ・新しい移動の概念
- ・緊急時に見えてくる魅力

<議論が必要な新しい要素>

- ・受け入れ能力・インフラ不足（小規模多機能自治 公務の最小化（地域の魅力化事業は民間で）
- ・受け入れ文化力不足

共通するライフスタイル

Key words

- ・密から疎な社会へ
- ・ゆったり移動（新幹線は1時間に一本、飛行機も1/10）
- ・オン・オフラインでの「人と会う、語り戯れる、そして共感する」（人は社会的動物）

- ・民意が反映される社会システム
- ・みんなとする仕事の有難さ
- ・食のギャランティー（田舎の人と拡張家族関係）
- ・都市と地方の同期
- ・コミュニティーの中での（未利用）資源の循環
- ・新デリバリーシステム（待ち遠しい（時間のかかるネット通販）
- ・ちょっとした不自由さを個やコミュニティーの知識・知恵・技で乗り越える（『間』を埋める）
- ・住む人の文化と空間を創り出す人の文化が生み出す暮らしのかたち
- ・シビックプライド ノンシビックプライド
- ・地域通貨

2 知識や教養が大切にされます、文化芸術は生命維持装置（命の次に大事なもの）

<ライフスタイルイメージ> 豊かさの価値が物質的な消費に依存する社会は終焉し、外的エネルギー消費から内的なエネルギー消費の時代へ移行する速度がますます早くなっているようです。エネルギーや資源を使わずとも豊かに生きるという価値が大衆化したのです。学校では画一化された一方通行の教育ではなく、必要に応じて必要な力を借りながら自分のペースで自分に合った場所で学びが提供されるようになり、誰でも一生学びを続けることが出来るようになりました。それは生活の場が家に移行したことも強く関係します。他者との比較ではなく家族のや個（人）の個性を醸成させ続けることが家族の生き方にもなっているからだと思います。一方では、都市と田舎の視座が近くなった結果、面白い現象も沢山起こり始めました。例えば、世界を代表するオペラと田舎の祭りのコラボレートが違和感もなく行われるようにもなったのです。先日女子中学生3人ほどがドニゼッティの『愛の妙薬』と『曽根崎心中』のお初を引き合いに恋愛論をぶつけていました、ちらりと聞いただけですが、この2つが同じ視点で見えているなんて・・・大したものですよ（笑）

都市から見たライフスタイル Key words

- ・本当に必要なものやコトが明確に
- ・振る舞いにあらわれる知識や教養
- ・考えた行動
- ・求められるクリエイティビティ

田舎から見たライフスタイル Key word

- ・生きるための学び（おばあちゃんの知恵袋（職人、知恵の伝承）

共通するライフスタイル

ライフスタイル 2-1 それが自由の相互認証！

昔、スローライフという言葉が流行ったそうだ、ゆっくり、ゆったり、心豊かに暮らすということだったらいい。当時のことは知らないが、今はまさにそれが当たり前だ。旅も食事づくりも、暮らしそのものが、ゆっくりというのではなく、時間をかけて丁寧になってきた。自由であるという概念もヘーゲルの言うように自由の相互承認（お互いがお互いに自由であることを認める）という概念が浸透してきたのか、コミュニティそのものがとても自立的でありながら他の異種のコミュニティを認め合うという、風通しが良くなったとでもいうのだろうか。学校の教育もその顕著な一つだと思う、娘が通っている中学校のクラスは二人の先生が担任だ。先生たちは何かを教えるというよりは、生徒が何をしたいのか、どうやったらそれが出来るのか考える手助けをしてくれるだけだ。娘は仲間を募って1年をかけて「豊かな暮らし」の定義を考えるのだという。日本と諸外国との違い、時代の違い・・・色々な文献を調べ議論し合い・・・1年後の発表会でどんな成果を聞かせてくれるのか楽しみだ。認知的な記憶や計算能力はAIも進化してそれほど重きを置かれなくなり、自由の相互認証を基盤にした、相手を想ったり寄り添ったり、その中で自分の考えを醸成して行くような非認知的能力が今は重要になってきた。それが理性のある社会の基盤と認識されているからだ。その結果なのか、子供たちの主張に納得してしまうことも多くなってきた、この子供たちがどんな大人になってくれるのか・・・

Key words 学びの個別化と共同（協同、協働）化の融合（探求、非認知的能力、社会性の鍛錬/そのためのメソッドロジー）体験の場づくり 一生学ぶ幸せ（苦勞とともに）

ライフスタイル 2-2 粋な目利きは変わり者？

いつのころからでしょう、ヴィンテージでもない30年も40年も前の車を若者たちがレストアして乗ることがブームになっています。アンティークショップも若者たちでにぎわっています。何を売ってるかって？ 驚きますよ、骨董品と言えるような洗濯機や家電製品、キーを手で叩くタイプライター、竹製の魚籠（びく）・・・昔の由緒正しきものを扱っていたアンティークショップとは全く違います。どうしてこんなものが売り物になるのかって？ さあ・・・売っている私もよくわからないのですが、とにかく修理して使えるようにすることが楽しくって仕方ないそうなんです。昔のものはばらして組み立てられることが原則ですからね、でも、それが尋常ではないんですね、その知識たるや恐ろしいほどで、それを武器に値段交渉されるのでこっちは全く手が出ません（笑）、でも手に入れた時の若者の満足そうな顔といったら・・・そう、ニュー目利き族とでも言うんですかね。

Key words 振る舞いにあられる知識や教養 体験の場づくり 目利きを魅了する
道具、ファッション、食（ブランドカ、価格より物語）

共通するライフスタイル Key words

- ・都市と田舎の文化共生（田舎では祭り、都市ではオペラ、交響曲）
- ・学びの個別化と共同（協同、協働）化の融合（探求、非認知的能力、社会性の鍛錬/そのためのメソドロジー）
- ・振る舞いにあられる知識や教養
- ・田舎が近づく（都市から見て）、世界がフラットに（田舎から見て）（地域内も地域と都市、地域と世界のコミュニケーション距離が同じになる）
- ・体験の場づくり
- ・地域文化と異文化の融合
- ・オン/オフライン-寺子屋・リカレント教育（大人の大学/教養、文芸、民芸、書道・華道・茶道・武道）
- ・人の魂を鍛える「道」、MBA から MFA へ）
- ・一生学ぶ幸せ（苦勞とともに）
- ・目利きを魅了する道具、ファッション、食（ブランドカ、価格より物語）

3 地域でつくれるものは地域で創ります

<ライフスタイルイメージ>

もう 10 年以上前になりますかねえ、あのころの日本は・・・食料自給率 37%、3 千万トン以上を海外から輸入し 2800 万トンほどを廃棄していたそうです、輸入量とほぼ同じ量を捨てるなんて…その中にはまだ食べられる 6 百万トンほどの食品ロスも含まれていたと聞きました。一人当たり 1 年間 51 kg にもなり、そのころの一人当たりのお米の消費量と同じほどだったそうです、驚きますね。モノもほとんどが海外の安い労働力に頼った修理の出来ないものばかり、地球環境が SDGs がなどと言いながら大量生産大量消費絶好調！というところだったのですかねえ。エネルギーだってすごいですよ、9 割以上を輸入に頼り、原子力発電を入れても自給率は 1 割にも満たなかったのですね。世界の人口は 75 億人から 2050 年には 96 億人に増えるというのに、多くを海外に頼って不安はなかったのかしら。

でも、たった 10 年程でこんなに変わったことにもびっくりね、結果として、都市と田舎という境界が希薄になったことがそれを加速化させたということなのでしょうが、食もエネルギーも、ものづくりも、そして学びも各々の地域の中でぐるぐる回るという概念が当たり前になってきました。何でもナンバーワンよりオンリーワンが大

事にされる時代とでもいうのかしらね・・・時間もゆったりと流れ、こんな時代を生きられるって・・・

都市から観たライフスタイル

ライフスタイル 3-1 お家もサーキュラーエコノミー！

1%に満たない東京の食糧自給率への不安が心の底にありながら、暮らしの中でそれを解決する方法がなかなか見つからなかった中で食の自給率向上運動が始まった、と言っても御上が考えたものではない。都市と田舎が近づくにつれ、豊かさの価値がお金から暮らし方に変化してきたからだと思う。ただ自分だけが一瞬間満足するのではなく、家族のことを、未来の子供たちのことを想うと、どう考えても自立的で循環を原理にした田舎の食生活の方が素敵に見えてくるからだ。もちろん、田舎を都市にそのまま持ち込むことはできないが、さすがに若い人たちのアイデアは面白い。生ごみは堆肥にして、それを使って野菜をつくり、それを美味しく頂くというシステムを家庭でも、少し大きな規模で商業的にも成り立つ方法を考えてくれ、静かなブームにもなっている。それに必要な商材も充実してきたが、何より派生的に色々なビジネスも生まれ始めた。私も毎週通っている男の料理教室、オンラインレストラン、有名レストランのデリバリーサービス…youtubeでも、バナナの皮を美味しく食べる方法だとか・・・笑っちゃうけどこんなものも沢山ある、でも、youtubeを見ながら気が付いた、自分が料理をするようになったから、こんなことも楽しめるのかと・・・よし今晩は子供たちにバナナのフルコースを試してもらおう、皮は本当に食べられるかな・・・

Key words アーバンファーミング 知消地産(食)への挑戦 旬 オンラインマルシェ 男の料理教室 巡る食の循環分配 生ごみを捨てない暮らし=コンポストのある暮らし (堆肥) テイクアウト デリバリー 宅配 オンラインレストラン 店内売り上げと 店外売り上げが拮抗するレストラン 食のリテラシー教育と実践 未利用資源の資源化 (有機物、無機物、金属)

都市から観たライフスタイル Key words

- Farm to Table
- アーバンファーミング 知消地産(食)への挑戦 旬
- 知消地産(食、エネルギー、サービス)
- オンラインマルシェ
- 男の料理教室 巡る食の循環分配
- 生ごみを捨てない暮らし=コンポストのある暮らし (堆肥)
- コンポストがローカルをつなぐ

- 世界のインフルエンサーとのつながり
- テイクアウト デリバリー 宅配 オンラインレストラン 店内売り上げと店外売り上げが拮抗するレストラン
- 目利きを魅了する道具、ファッション、食（ブランドカ、価格より物語）

田舎から観たライフスタイル

ライフスタイル 3-2 都市から堆肥がやって来る！

昔、地産地消という言葉が流行ったが、今は違う、知消地産だ。ここで必要なものはここで作るということ、食べ物だけではない、基本的には何でも知消地産が原則だ。食べ物に限っても、気候が違えば出来るものも違う。それでいいと思うし、それこそが地域の顔や味になるから、少しだけ誇らしくも思えてくるし、時には姉妹関係にある田舎から珍しい野菜やを送ってきてくれることもある。最近、都市とも姉妹関係を結んだ。定期的に食料の供給をする役目だ、都市からは色々な人がやって来るし、ここが気に入って住み始めるものもいるが、協定を結んで一番の驚きは堆肥が都市から送られてくることだ。都市でも、食については理解が進み、食品ロスなどは随分少なくなったそうだが、それでも出てくる食品廃棄物をコンポスト化して田舎に送る事業が始まった。何でも会員制らしい。その堆肥を使って野菜をつくり、都市へ送る。その野菜くずが堆肥になってまた戻ってくる… 都市から堆肥が届くとは…不思議な世の中になったものだ・・・ この田舎にも、若い人が随分と移住してきた、テレワークが進んだ結果だが、若者たちも自然に触れることを楽しみたいのか、畑づくりがブームになった。先生は80を過ぎたお爺やお婆たちだ。もともと底抜けに明るいお爺やお婆だが、若者たちと毎日のように出会い、ますます元気になった気がする。先日会った折、『この時期は長靴の根っこのワインがうまいのう！』などというので、何のことかと思ったら、北イタリアの赤ワインのことらしい、ここの野菜と若い移住者たちをターゲットとして出来たイタ飯屋にどうやら若者たちと時折出かけているらしい。本当にワインの味、わかっているのかしら・・・

Key words 地域外に頼らない商材（モノ・食・エネルギー）の循環 知消地産（食、エネルギー、教育、ものづくり、サービス） NO.1 からオンリー1（ブランド創り）へ 未利用資源の資源化（有機物、無機物、金属）

田舎から観たライフスタイル Key words

- 地域外に頼らない商材（モノ・食・エネルギー）の循環
- おばあちゃんの知恵袋
- 食料自給率 90%へ
- 巡る食材（流通システム）
- 知消地産（食、エネルギー、教育、ものづくり、サービス）

- 多機能小規模自治
- NO. 1 からオンリー1(ブランド創り)へ
- 中国から戻ってきた工場

共通するライフスタイル

ライフスタイル 3-3 AIが叱られる！

ものづくりの拠点が田舎に移動し始めた。大量生産・大量消費という概念が希薄になったので、大工場が不要になったのが原因だ。海外の安い労働力という概念も同様で、そんなものはとっくに無くなっている。無論、今でも大企業はあるが、色々な田舎に小さなファクトリーが分散しているシフランチイズ化しているものもある。大量生産・大量消費に代わる概念はオンリー・ワン、そして修理可能なものづくりである。地域地域で同じ種類の商材でも個性が異なる。地域でしか使われない独特のものもある、とっていたら、これが売れていたりする、不思議だ。これも目利き族が増えたせいなのかもしれない。ともあれ、地域の個性といつまでも修理して使える商材は、修理や工夫を繰り返すうちに、地域の個性から家族や個（人）の個性に変化して行く、時には親から子供へ、さらに…というのも珍しくない。そうなると間違いなく愛着の湧く個性に変貌するわけだ。そういうものをつくっているファクトリーの人たちも随分と変わった。髭を伸ばして職人風の風体をしていたり、地域の人たちから一目置かれている人たちも沢山いて、ものづくりをしている人たちも個性的だ。ファクトリーではAI（人工知能）をフルに活用し、AIで出来ない高度な部分を職人風エンジニアが担当する、いつも勉強が足らぬと叱られているAIは可哀そうですが……

Kew words NO. 1 からオンリー1(ブランド創り)へ 中国から戻ってきた工場 知消地産(食、エネルギー、教育、ものづくり、サービス) 目利きを魅了する道具、ファッション、食 (ブランド力、価格より物語)

共通するライフスタイル Kew words

- 食のリテラシー教育と実践
- トラッドテクノロジーで新しいものづくり (工夫、使いこなし、「間」を埋める)
- ファーミングスクール
- 未利用資源の資源化 (有機物、無機物、金属)
- 緩く繋がる隣町
- 和食への回帰

4 自然をもっと意識した暮らしになります

<ライフスタイルイメージ> 地域間は大型の4連結トレーラーなどが高速道路を走って繋いでいますが、地域内の移動は小さな電気自動車や自転車が主役になりました。都市では交通量も随分と減ったので、道路のアスファルトを剥がして自然公園にしたり、週替わりで面白い屋台が立っていたりします。お蔭で一人で、あるいは家族と近場を散歩しても必ず緑に出会えるようになりました。道すがら摘んだ野草が食卓に上ることも多くなりました。緑の中を抜けてくる風に匂いがあることも知りましたし、鳴き声だけで鳥の名前もいくつかわかるようになりました。夏の暑い日、木陰に入ると何とも爽やかで、小さな葉っぱにしがみついている虫たちにも愛おしさを感じます。10年前には風が吹いても生暖かかった思い出しかなく、自然にこれほどの力があったことを体感できるのはとても素敵です。昔を知らない子供たちは、田舎は自然があっていいなと繰り返しますが・・・姉妹協定を結んでいる田舎には家族で出掛けることも多いのですが、子供たちは毎年4か月くらい田舎留学しています。最先端のAIなどの授業はテレワークですが、田舎にいる時の多くの時間は都会風に言えばサバイバル学習です。田舎のお爺やお婆が先生になって野菜をつくり、素潜りで魚を取り捌き、料理を作り、ロープワーク、野宿の仕方・・・こんな山ガキ、海ガキ教育、遅くなるはずです。上級生になれば、下級生に自分の知識や技を伝え、自分はさらに工夫を繰り返し、上位の学びを続けるそうです。人に寄り添い、人の痛みがわかり、相手を認めながら自分の主張や行動もしっかりと組上げて行く、非認知能力というのだそうですが、変化してゆく子供たちの成長は時には眩しくも見えてきます。先日、階段で足をぶつけ腫れてしまい、痛くて湿布薬を探したものの見つからず子供に頼んだら、何とも家の前のヨモギを取ってきて煎じて、あっという間に塗り薬をつくってくれました。キツネにつままれた気分でしたが、こんなことも教えてもらえるんですね…

都市から見たライフスタイル Kew words

- ベランダ菜園 かわいくて摘めなくなった
- Farm to Table
- 自然の中での長期滞在型観光(都市から田舎へ)
- オーガニック食、衣料、化粧品
- 自然公園
- 外の空気に触れる喜び
- 自然の風に、匂いに、色にそして虫や鳥にも恋する

田舎から見たライフスタイル Kew words

- 地域の人のための地域の自然を学ぶ(新しい観光)
- パーマカルチャー

共通するライフスタイル Kew words

- ・自然の中での新遊び（山ガキ、海ガキ、秘密基地）
- ・自然の中での競技
- ・自然の回復(森林、海、河川)
- ・自然療法
- ・五感 匂 匂い（自然に畏敬の念を抱き、自然と共に生き、見えないものの力を信じ、生きてきた DNA を磨き直す）
- ・ネイチャースクール
- ・絶滅危惧種が増加傾向
- ・災害には先達の知恵

5 健康であることが大切にされます

<ライフスタイルイメージ> 10年前に比べて、寿命はそれほど延びてはいませんが、それは死に対する理解が進み、尊厳死の選択が出来るようになったからようです。一方で健康寿命は世界一になりました。まず働き方が大きく変わったことが一つの理由だと思っています。テレワークが始まって、仕事に年齢とか肩書とかの意味合いが希薄になりました。指示された仕事をこなすというのではなく、自分で仕事を生み出し、会社にそして結果として社会に貢献するという意志のようなものが生まれたからです。そうすると会社に属するというより、会社と自分の目線は対等になり、そうですね、能力によって契約をしている感じです。ネクタイをして毎日時間通りに通勤していた時代が信じられませんが、今はいくつかの会社と契約を結んで週休3日くらいのイメージで仕事をこなしています。使うことはあまりありませんが名刺はいつも5-6枚ありますね。と言っても、結局は好きな仕事を選んでいる訳ですから基本的にはワークもライフも境界が無くなっているという感じですかねぇ・・・もちろんストレスが溜まることはありますが、それは自分に対してですから、毎日仕事を指示されていた時代とは質が全く違います。テレワークでも、定型の仕事をしている人たちにはまだ定年という概念が残っていますが、2-3次産業の多くの人たちには定年は無くなりました。1次産業の人たちと飲んでみるとよく、死ぬまで現役そしてぽっくりよ、と大笑いしながら言いますが、やっと僕たちも同じ感覚になりました。頭がついて行けなくなったら定年です。生活環境も大きく変わりました。時間をかけても丁寧な暮らしのかたち、昔でいうスローライフのようなものかな、自然や食のリテラシーを大事にすることが生活の基本になって、健康のため！健康のため！というのではなく家族や自分と向き合いゆったりと暮らすことも大きく影響しているのではないかと思っています。そうそう、家中心の暮らしでご近所さんらとの関係が濃

くなったことも影響があるかもしれませんが、お互いに差し入れがあったり、一緒に運動したり、とにかく会えば大笑いの連続ですから……

(平均寿命/健康寿命(2018) 男 80.98/72.14 歳、女 87.14/74.49 歳)

都市から見たライフスタイル Kew words

- ・働き方革命(週休3日6時間労働)
- ・インテリジェント/スマートスポーツ
- ・マクロビオティック/パーソナライズ
- ・新コミュニティー

田舎から見たライフスタイル Kew word

- ・コミュニティーの強化(遊び、多機能小規模自治、仕事)

共通するライフスタイル Kew words

- ・死ぬまで現役
- ・尊厳死
- ・食リテラシー(自分の命にもワクワクにも環境にもよい選択をする能力)
- ・ワークとライフのオーバーラップ

6 お金をかけずに生活を楽しみます

<ライフスタイルイメージ> 経済成長率という言葉はついぞ聞かなくなりました。もちろんマイナスでは困るのですが、限りなくゼロに近くてもいいじゃないかという思いが社会を覆っています。経済成長率だけが国の豊かさの指標の時代もありましたが、結果として大量生産大量消費という活動が大きな地球環境負荷を生み出し、お金だけが豊かさの物差しとなって人の心まで荒んでいたようです。今はちょっとした不自由さの中で自分やコミュニティーの知恵・知識・技を使ってその不自由さを乗り越え、結果として生まれる愛着感や充実感、達成感を味わうことが当たり前になってきました。ちょっとした不自由さというのは、実は『喜ばしい制約』だということに誰もが気づき始めています。小さな土地があれば、いやベランダでも季節の野菜をつくりご近所に差し入れ、DIYの得意なお隣さんは、お年寄りの家を時々訪問しているようです。お互いさまという言葉も復活しています。流行りの言葉で言うならコミュニティーの中でシェアやレンタル、共同作業のようなもの、多機能小規模自治みたいなものでしょうか、そんなお互い様が自発的に生まれ始めたという感覚です。豊かさが、物質的なものから精神的なものへ移行し、一過性では無く、ゆっくりと積み上がってゆく文化的なものが大事だということもあるかもしれません、あらゆるものが、丁寧にゆっくりと時間をかけてつくられ、その過程を楽しみ、出来上がった成果を楽

しみ、ものであれば修理を繰り返し、使い切る。文化や教養であれば、それを土台にまた次の高みへ向かって行く、そんな暮らしにはお金という価値は当然一番ではなく『喜ばしい制約』を個（人）や家族、あるいはコミュニティで越えてゆくことに最も大きな価値があるように感じています。

都市から観たライフスタイル Kew word

- ・暮らし方（拡張家族）

田舎から観たライフスタイル Kew word

共通するライフスタイル Kew words

- ・自立（『間』を埋める、DIY、修理、考える(思考)、目利き、学ぶ、遊ぶ）
- ・喜ばしい制約（我慢のためではなく）
- ・お互い様
- ・コミュニティ（文化、教養、心のアップサイクル）
- ・情報交換(オン/オフライン、コミュニティ)
- ・コミュニティ、シェア、レンタル、共有、活かしきる、知足

7 時々思い切って贅沢します

<ライフスタイルイメージ> 出社するって贅沢だよね、本社まで出かけると4日は掛かるからね、ゆっくりと旅する気分・・・そんな時はリアルに友人たちと一献会も計画して・・・リアルって五感をフルに使うからかもしれないけれどテレワークで話している時と何か感覚が違うのよね。リアルっていえば、本屋さんも贅沢だよね、古本屋さんの方が好きだけど、ちょっとかび臭い紙の匂い、1ページずつ手でめくってゆく感覚、時間をかけてゆっくり本を選ぶなんて・・・わかっている気はしていたけれどリアルに経験すると全く違う感覚になるって、とても贅沢なことだと思う。姉妹協定を結んでいる田舎だって、数日伺うのと1か月住まわせて頂くのでは全く違う、旨く言えないけれど景色や臭いや音が自分のものになるって感じかな、でも同じ景色や臭いや音は二度と繰り返さない、毎日違うの、そこでは日常なのだけれど感覚としては非日常、自然って揺らいでいるようにも感じるからね、そんな経験が出来るのも、とても贅沢なことだと思う。

都市から観たライフスタイル Kew word

- ・時々の贅沢が地域貢献

田舎から観たライフスタイル Kew word

共通するライフスタイル Kew words

- ・時間、文化、祭り、非日常を楽しむ

4. あとがき

本報告書は、3月末にコロナ禍の影響を調べるために全国およそ10か所を調査し、コロナ禍に何を学ぶかをバックキャスト思考を使って仮説として提案した7つの要素をたたき台に5月7-23日の間にFace Book 公開グループに参加頂いた方々、東北大学大学院環境科学研究科に開校した社会人大学院 SEMSaT（高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニット）修了生の方々とのWEB会議、（一社）サステナブル経営推進機構（SuMPO）理事会の方々から頂いた貴重な意見を参考にまとめたものである。

キーワードをもっと集め、それを使ってもっとたくさんのライフスタイルを描き、そこから、新しいビジネスや政策を提言するのが最終的な目的であるが、まずは、今ある材料を用いて Ver.1 の報告書をつくり、急ぎ多くの方に観て頂き、ご批判やご意見をもとに、さらに次のステップに進みたいと思う。

多くの方からの御意見をお待ちしています。

2020.05.27 石田秀輝（沖永良部島にて）

